



一中だより

2月号
令和4年2月1日
小平市立小平第一中学校

■顔をあげて 前をみよう

校長 栗林 昭彦

コロナウィルス感染症が収まりません。都の新規感染者が一日一万人を超える日もあり、本校でも先月には学年閉鎖や学級閉鎖の措置を取りました。3年生が受験シーズンに突入するこの時期、「うつらない うつさない」をいっそう意識をして生活するよう、生徒には指導をしていきたいと思います。

3年生は今月が進路選択の山場になります。すでに推薦入試は先月から始まっていますが、合格発表、入学試験と続き、心の落ち着かないひと月になります。もちろんこれまでの先輩たちも通り過ぎてきた道ですから、3年生の諸君には何とか乗り切ってくれるよう祈るばかりです。

先月、大学入試共通テスト当日の東大前の路上で発生した、高校生による刺傷事件はたいへんショッキングなものでした。人の命を救う医学を志そうという生徒が人を切りつけるというのは、ありうべからざることです。報道を見るにつけ、当該の生徒にとっては「医者」というステータス、もっと言えば「東大理科3類」に入るといことが何よりも大切で、人の命を救うという医学の根本の部分を見失っていたように思えます。「医学」という接点をもちながら、コロナに対応し、夜を日に継いで治療に当たっている医療関係者の方たちとは180度違う考え方には、何とも言えない寒々しさを感じます。

しかし入学試験に臨む当事者がこのように「入試に受かること」に大きな価値を置いてしまう傾向は大なり小なりあるものです。実際入試に臨む3年生の皆さんも「とにかく合格したい」と思っていることと思います。しかし残念ながら、不合格になってしまうことだってありうる。そのときに、「入試に受かること」を絶対的な目標としていたら、立ち直れないです。今回の刺傷事件の高校生も、そういう価値観を強く持っていたのだらうと思います。

入試はハードルに似ています。ハードル走で、一つのハードルをきれいに跳んだところで満足する人はいません。いくつものハードルを越えて、ゴールテープを切ることが目的です。一つのハードルを倒してしまっても、それでおしまいはない。挽回できるはずです。

高校のパンフレットは進学実績に多くの量を割き、新聞には「〇〇高校 〇名合格」と掲げた塾の折込チラシがたくさん入る。書店では「子どもを東大に入れました」という親の書いた本が売れる。どれも「ハードルを越えること」に重きをおいて、ハードル走全体への意識が足りないように感じます。目の前のハードルだけを見るのではなく、顔をあげてもっと前を見ていくことこそが大切なのではないかと強く思います。

刺傷事件を起こした生徒は、ノーベル賞を受賞した（これこそ大きなステータスかも知れません）山中伸弥先生のこの言葉をどう思うでしょうか。

「医者は病気ではなくて人間をみるものです。そうすると医者というのは卒業した大学では決まらないな、ということはずごく思います」（「山中教授、同級生の小児脳科学者と子育てを語る」（講談社 α 新書）から

残念ながらこのコロナ禍で、入試に臨む、また発表を終えた3年生にお話する機会がありません。機会があったらこんな話をしたいなと思っていました。結果はどうであれ、一つのハードルを越えたに過ぎない。さらに前に続く道を、顔をあげて見ていく生徒たちであってほしいと思います。



